

# 戦後80年 太平洋戦争関係所蔵資料データ等の公開について

横浜みなと博物館 島宗美知子

## はじめに

2025（令和7）年は戦後80年の節目の年であった。公益財団法人 帆船日本丸記念財団が管理運営する横浜みなと博物館では、太平洋戦争にかかわる2種類の資料データ等の公開を開始した（図1）。「SCAJAP（スカジャップ）番号標示船写真」と

「重要文化財帆船日本丸附資料 日本語記載の航海日誌」である。本稿では、それぞれの資料の内容と、公開方法等について紹介する。

## 1. SCAJAP番号標示船写真

1945（昭和20）年の敗戦により、連合国総司令部に日本商船管理局（SCAJAP = Shipping Control Authority for JAPANESE Merchant Marine）が設置され、その管理下において、鋼船で100総トン以上の日本船舶は登録番号であるSCAJAP番号を舷側に標示し、運航許可を得て航行することになった。これはサンフランシスコ講和条約が発効された、1952（昭和27）年まで行われた。

2002（平成14）年、1,900枚あまりのSCAJAP番号が標示された船舶のプリント写真が日本郵船歴史資料館（現 日本郵船歴史博物館）から横浜みなと博物館へ寄贈された。

写真の大きさは六つ切り（203×254 mm）程度の横型で、まれに小型や、六つ切りよりも若干大きめ、また縦型のものもある。すべてモノクロ写真で、写真の左上に紙テープ状のものが貼られ、SCAJAP番号と英語で表記された船名がタイピングされている（図2）。

プリント写真の裏面には、船名やSCAJAP番号が手書

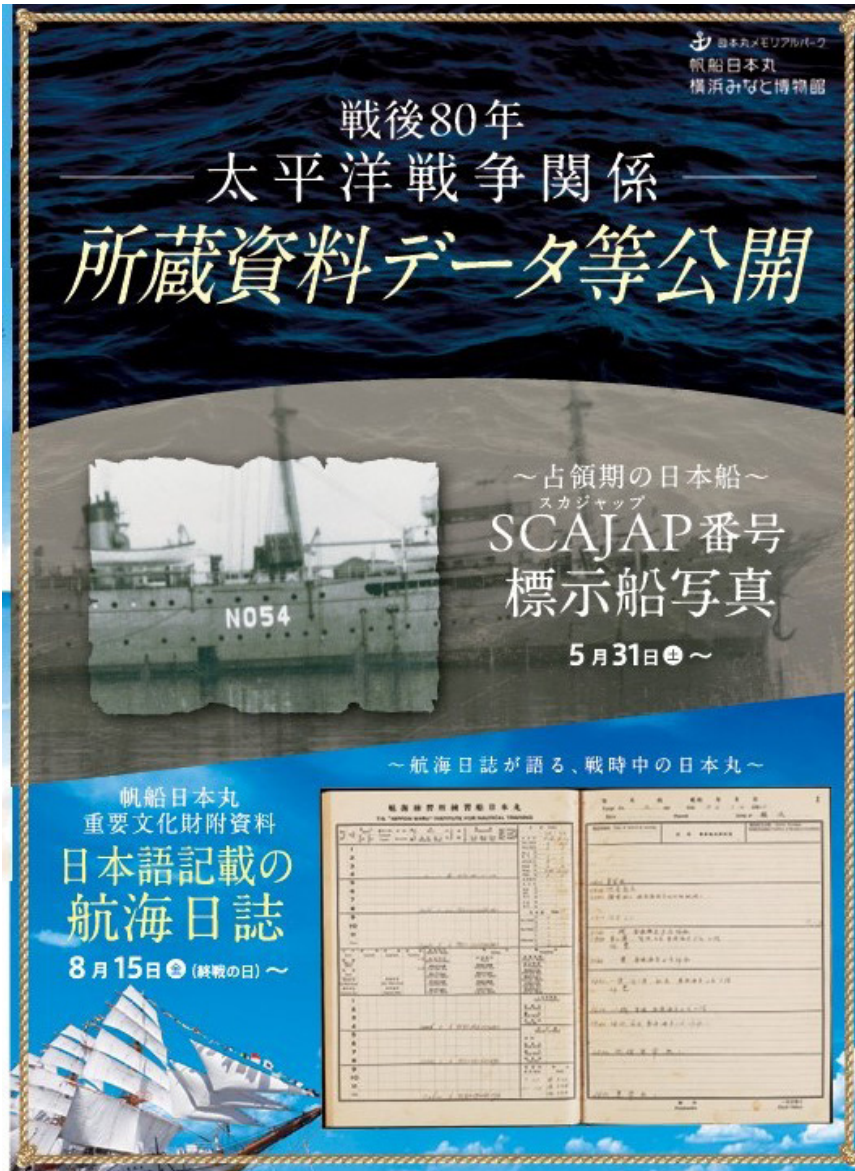


図1 戦後80年 太平洋戦争関係 所蔵資料データ等公開 チラシ（A3判 ニつ折り）。

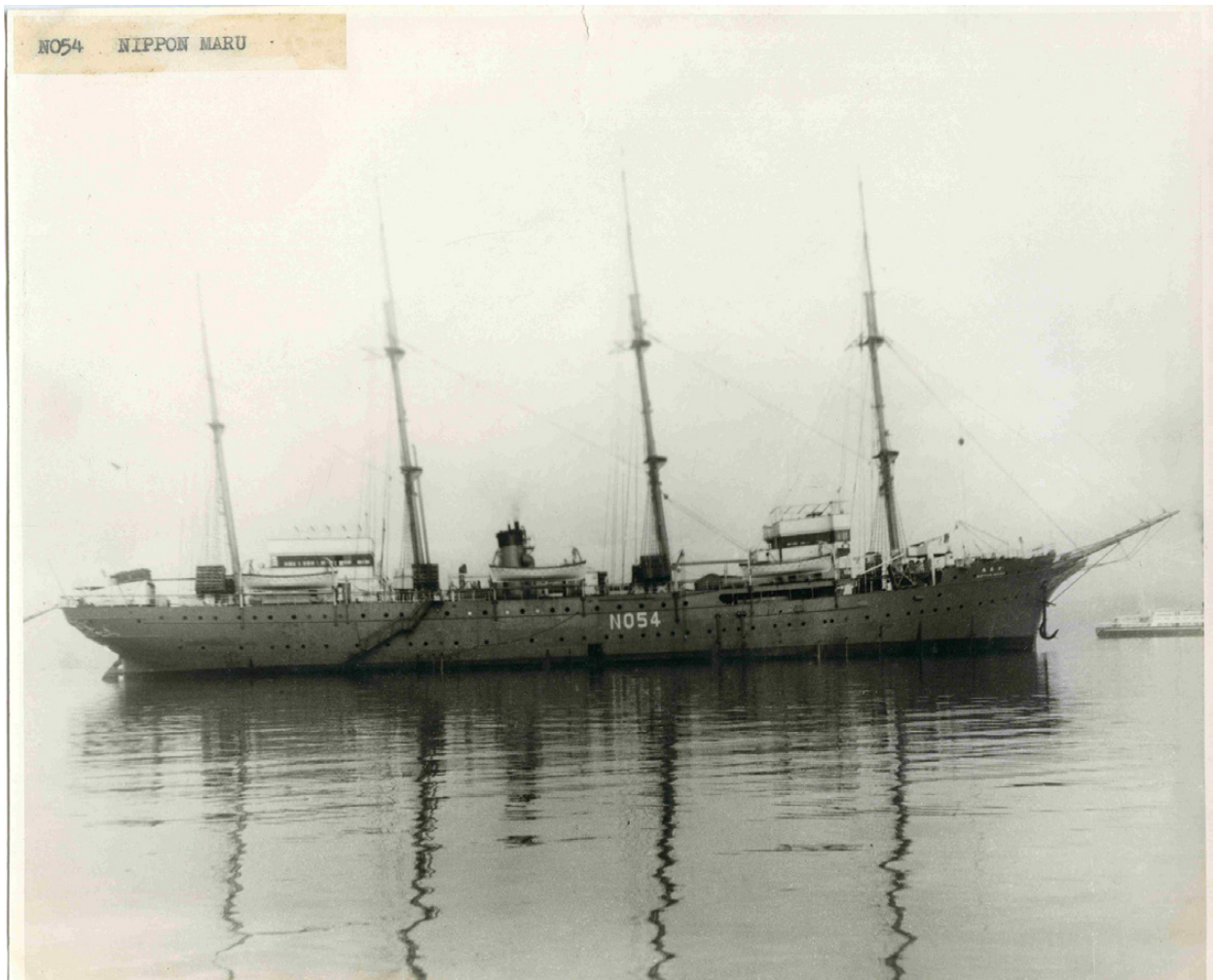


図2 SCAJAP番号 N054 練習船 日本丸.

きで記されていたり、海運会社や造船所のスタンプが押されていたり、写真館のスタンプが押されているものもある。

専門家によれば、これらの写真はSCAJAP番号標示船のうちの約8割を網羅している、という。

2002（平成14）年に寄贈を受けた際、SCAJAP番号標示船写真について船舶史の専門家の協力を得て、写真をSCAJAP番号のアルファベット順に並べ、船名、船種、そして船主についてリストを作成した。それから20年ほどが経過し、あらためて写真を眺めてみると、戦後の日本を支えた数多くの船の姿がそこにあった。戦後80年の節目の年にこれらの写真を公開し、SCAJAP番号標示船とはいかなるものなのかを広く知っていただくこと、占領期の联合国総司令部の日本船管理について関心を持っていただくこと、そして戦後に活動した日本船の写真を公開して、日本船研究がより深化していくことなどを願って公開することとした。

写真の公開は、横浜みなと博物館ライブラリー

で、パソコンでのデジタルデータと、冊子（紙ベース）での閲覧とした。来館者には冊子でSCAJAP番号標示船の写真の概略を見ていただき、デジタルデータで拡大して船の細部までご覧いただきたい、という趣旨である。横浜みなと博物館ライブラリーを閲覧場所としたのは、ライブラリーの利用促進を考慮したものである。

実際の作業は、2024（令和6）年の6月からスタートした。長年、横浜みなと博物館の事業にご協力をいただき、船の調査を続けてきた船舶部会「横浜」の協力を得て船ごとのデータの整理・修正を進めた。

11月上旬から本格的にデジタル化の作業を始めた。寄贈された時よりも技術が進歩してデジタル化作業が容易になったことから、デジタル化の作業（スキャニング、写真データ1点ごとにSCAJAP番号、船種、船名、横浜みなと博物館の資料管理番号を入力）は博物館内で行った。解像度は600 dpi。寄贈をされた写真は1,900枚余りだ

が、裏面に記載がある場合には裏面もデジタル化したため、データ総数は3,000点を超えた。デジタル化作業は翌2025（令和7）年3月上旬まで5か月あまりを費やした。

全ての写真のデジタル化の目途がついたところから、冊子（紙ベース）の準備を始めた。船名のアルファベット順にA4判1ページに3隻の船の写真を掲載し、プリント写真裏面にデータがあるものについては、裏面画像を船体写真の横に添える、というレイアウトとした（図3）。

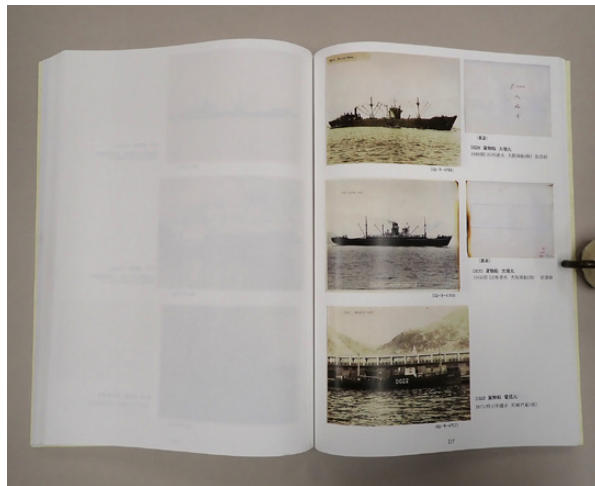


図3 SCAJAP番号標示船冊子のイメージ。船の写真が鮮明に見えるよう、片面印刷とした。

冊子（資料集）は8冊1セット（1. 解説・総目次、2. SCAJAP番号標示船写真のアルファベット順に A～E、同3. F～J、同4. K、同5. L～N、同6. P～S（O、Qなし）、同7. T～U、同8.W～Z（Vなし））を印刷製本し、ライブラリーに配架した（図4）。

パソコン1台を設置し、SCAJAP番号標示船写真のデータと冊子（資料集）は2025（令和7）年5月31日（土）より横浜みなと博物館ライブラリーで公開を開始した（図5）。WEBサイトには、船名のアルファベット順の目次を掲載した。ライブラリーでのデータ閲覧は、占有を防ぐために1回30分程度とした（他の利用者がいなければ、継続可）。

あわせて、SCAJAP番号標示船や今回公開した写真の一部を紹介するパネル展を博物館ロビーで8月11日（月・祝）まで実施した。

公開後、船に関心のある方や調べ物をしておられる方がライブラリーにお出でになり、熱心にデジタルデータや冊子をご覧になっていた。何人か



図4 ライブラリーに配架したSCAJAP番号標示船の冊子（資料集）。右側の2冊の黒い冊子は参考文献。



図5 SCAJAP番号標示船のデジタルデータが閲覧できるパソコン。

にお話を伺ったところ、「見たことのない船がたくさんある」「〇〇という船の写真を探していた。



図6 帆船日本丸.

WEBの目次に船名があったので見に来た」「絵本に描く船の写真を確認にきた」などとお話されていた。また、冊子の複写や画像データの貸し出し申請もあった。

## 2. 帆船日本丸 重要文化財附（つけどり）資料 日本語記載の航海日誌

公益財団法人 帆船日本丸記念財団が管理運営する帆船日本丸は、2017（平成29）年に国の重要文化財に指定された（図6）。このとき、船体1艘とともに附（つけどり）として、日誌類をはじめとする文書記録類181点及び図面類351点（計532点）が指定された。これら附資料は、横浜みなと博物館で保管し、整理を進めている。

帆船日本丸では、法令に従い、航海上の基本情報、例えば船の行動や気象、燃料や清水（せいすい）の残存量、船内の出来事等を当直航海士が英文筆記体で航海日誌に記載していた。日誌類の整理を行うなかで、太平洋戦争中の1942（昭和17）年8月から終戦後の1945（昭和20）年9月までは日本語で記載されていたことがわかった（図7）。

太平洋戦争中の帆船日本丸の行動については、帆や帆桁（ヤード）を取り外して汽船となって瀬

戸内海に移動し、戦時緊急物資輸送（石炭輸送）を実施、終戦間際には神戸港に長く停泊していたとされ、詳細な行動はあまり知られていない。

しかし、太平洋戦争中の航海日誌を読むと日々の行動がよくわかる。実習生を乗船させて航海訓練を継続し、北九州・若松港と兵庫県尼崎の日本発送電を往復して石炭輸送を行い、潜水艦の攻撃を避けるための之字運動（のじうんどう）の訓練や広島県の大竹にある海軍潜水学校で対潜訓練を行っていたこと、空襲が激化すると空襲警報や警戒警報に備えて疎開錨地へ移動、近くで被災した船があれば救助に向かった、などの日々の記録が日本語で記載されていた。

戦後80年の節目に、帆船日本丸の戦時中の活動について広く伝え、帆船日本丸への理解を深めるとともに戦争と船について考えるきっかけにしたいと考え、日本語で記載された航海日誌のデジタルデータとデータから1日分をA3判1枚に出力した冊子の公開を行うこととした。公開場所はSCAJAP番号標示船写真と同様に、横浜みなと博物館ライブラリーである。

2023（令和5）年末ころから、公開に向けての準備を始めた。日本語で記載された航海日誌のペー

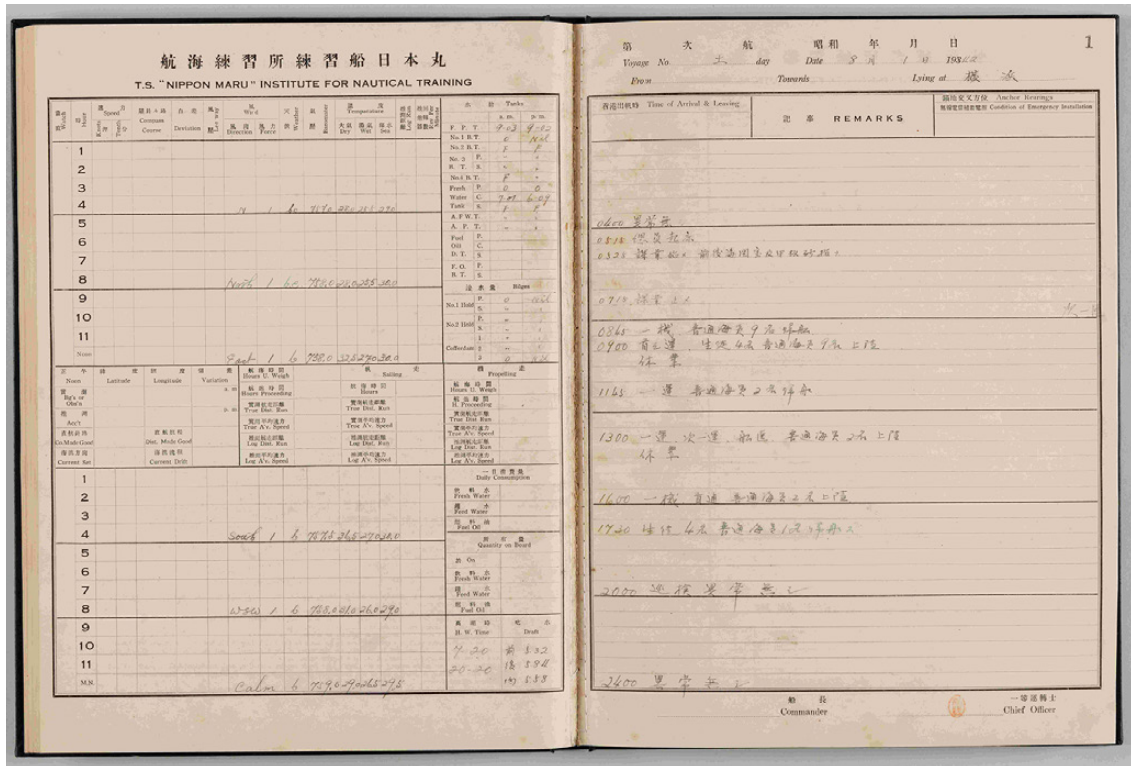


図7 日本語で記載された帆船日本丸の航海日誌 [1942年8月1日]. 右側のページにその日の出来事が記載されている。

ジすべてを簡易的に撮影し、出来事が記載されている部分を中心にデータ入力を行っていった。当初は、日々の出来事をすべて入力していこうと考えたが、文章量が多く公開予定の2025（令和7）年夏までの入力が難しいことがわかった。そこで、まずは毎日の日本丸の位置情報（発着港名、錨泊地）をエクセルデータに入力することから始めた。一通り入力したのち、航海日誌の出来事ページの記載内容のなかで『練習帆船 日本丸・海王丸』（千葉宗雄著、1973年 丸の内出版発行）を参考に戦争にかかわる内容を中心に入力を進めた。

2024（令和6）年末より、戦後80年となる2025（令和7）年夏の航海日誌デジタルデータ等公開作業が本格化する。公開にあたって関係各所との調整、リーガルチェック、今後の帆船日本丸資料の整理保管・公開に活用するための閲覧料金設定についての検討などを始めることとなった。また博物館内で戦時中の帆船日本丸の行動について紹介するパネル展を計画していたが、あわせて、多くの人が行きかう横浜市役所での展示の提案もあり、これらを並行して調整を進めた。

2025（令和7）年2月から3月にかけて附資料として指定されている帆船日本丸の航海日誌（全70

冊）のデジタル化を実施（委託）。データ納品後に横浜みなと博物館で1日ごとのデータにタイトル（主に日付）の入力を行った。

閲覧料金は、日本丸の所有者である横浜市と協議をすすめた。デジタルデータ、冊子（紙ベース）ともに半日1,000円、冊子からのコピーは1枚100円（カラー）とした。時間制限があり有料閲覧となるため、事前の予約を呼びかけることとした。

2025（令和7）年8月15日（金・終戦の日）から、帆船日本丸の日本語記載の航海日誌のデータ等の公開を横浜みなと博物館ライブラリーで開始した（図8）。あわせて、博物館ロビーでは航海日誌と太平洋戦争中の帆船日本丸の活動について紹介するパネル展を実施した（図9）。

WEBでは、日誌データ等の公開のお知らせと、閲覧の参考にしていただくため、位置情報と戦争に関わる記事を入力した抜粋版を公開した。

また、9月中旬には、横浜市役所内2か所で帆船日本丸 について紹介する展示を行い、より多くの方々に太平洋戦争中の帆船日本丸の航海日誌と、帆船日本丸の歩みについて紹介をすることができた（図10）。

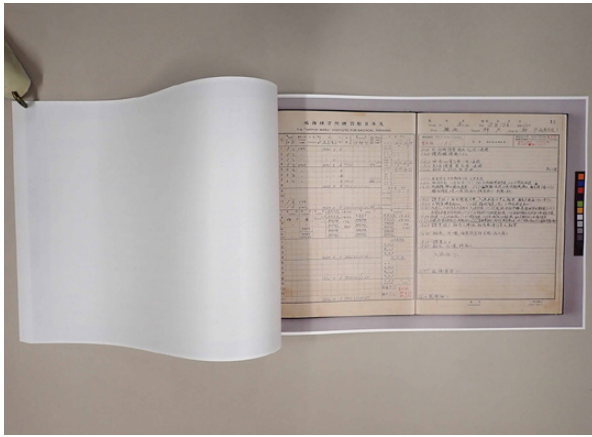


図8 航海日誌データを出力した冊子。A3判1枚で1日分の日誌が見られる。



図10 横浜市役所2階での展示の様子。



図9 帆船日本丸 日本語記載航海日誌パネル展。

### 3. 終わりに

2020（令和2）年の戦後75年の年は、コロナ禍で活動が制限されていた。そんな中で、太平洋戦争を体験された方が高齢になってきていて、戦争について伝えることが難しくなっていることが新聞等で報道されていた。各地にある太平洋戦争関係の資料を展示していた資料館等も資金や運営を担

う人材が不足して閉鎖になっているとも聞いた。一方で10代の若者が、戦争体験者から話を聞いてそれを次の世代に伝えることが私たちの役割である、との決意を新聞の投書欄で見て心強い気持ちにもなった。博物館に務めるものとして、所蔵する資料で何かできることはないか、と考えはじめていた。

2022（令和4）年にはウクライナ侵攻が始まり、戦争への不安がこれまで以上に強く感じられるようになった。そして、2025（令和7）年の戦後80年の節目の年に、横浜みなと博物館が管理する資料を活用して、太平洋戦争と船について考えるきっかけにしてもらえるような事業を行うことを目指した。

公開したSCAJAP標示船の写真と、日本語記載の航海日誌のデジタルデータ等の公開は、横浜みなと博物館ライブラリーで今後も継続していく予定である。いつでも、ここに来れば見られる。博物館の資料を大いに活用して、戦争や船を始めとする様々な研究に役立てていただければと願う。